

棚田に吹く風

2025
秋
Autumn
季刊

2 特集
棚田サミットの30年

8 棚田・里山からのたより
西山の棚田
三重県伊賀市西山地区

10 フォトエッセイ
よみがえる西谷棚田

11 棚田BAR
生きものの屋の里山考

12 読者のひろば

14 棚田俳壇
スタッフのつ・ぶ・や・き

15 Project Report





第28回那智勝浦町・小阪の棚田



第14回長崎市・大中尾の棚田

特集 棚田サミットの30年

全国棚田（千枚田）連絡協議会30周年に寄せて



全国棚田（千枚田）連絡協議会
会長（上田市長） 土屋 陽一

全国棚田（千枚田）連絡協議会が発足して30年、棚田サミットも30回目の開催となる節目の年を迎えました。これまで棚田を守り、育て、次世代へとつなぐ活動を続けてこられた全国の皆様に、心より敬意を表します。

当協議会は、棚田を有する市町村や団体及び個人のネットワーク化を図るとともに、地域の活性化を図ることを主な目的として1995年（平成7年）に設立し、棚田サミットの開催や国への要望活動などを通じて棚田保全の道を切り拓いてまいりました。

この間、国では日本の棚田百選の認定や中山間地域等直接支払制度の創設など様々な動きがありましたが、一番大きな出来事と言えば、令和元年に棚田地域振興法が施行されたことであります。

この法律により「棚田は貴重な国民的財産である」と位置付けられたことは、棚田を守る我々にとって大きな後押しとなり、関連施策の実施により保全活動への機運も高まっております。法の成立に向け心血を注いでいただいた棚田振興議員連盟や関係省庁の皆様方にあらためて感謝を申し上げます。

げます。

また、棚田地域振興法は今年改正・延長され、新たに移住・定住及び二拠点居住の促進や都市と棚田地域の交流の促進等の規定が盛り込まれました。棚田地域を含む中山間地域は担い手の確保が年々厳しくなっていく中、都市住民との交流を深め、関係人口を創出していくことも棚田の保全には欠かせない視点であり、当協議会としましては国の支援等を継続して要望してまいります。

棚田は、日本の原風景であり、地域の文化や暮らしを映す鏡でもあります。急峻な地形に刻まれた美しい曲線は、先人たちの知恵と努力の結晶であり、私たちに自然との共生の大切さを教えてくれます。さらには、希少な生き物の宝庫であり、伝統文化の継承、国土保全の観点からも重要な役割を果たしています。

今後とも、当協議会が果たす役割はますます大きくなってまいります。棚田地域の持続的な発展に向けて人と人とのつながりを深め、地域を越えて連携し、次の世代へ希望をつないでいきたいと思います。



1：第1回枳原町・総会／2：第5回紀和町・交流会／3：第8回鴨川市・分科会／4：第10回相知町・現地見学会／5：第12回日南市・閉会式
6：第16回松崎町・事例発表／7：第18回山都町・オープニング／8：第19回有田川町・マグロ解体ショー／9：第21回玄海町・交流会
10：第22回佐渡市・U30分科会／11：第25回長門市・“自主”分科会／12：第29回上田市・開会式

全国棚田(千枚田)サミット 開催地一覧 [第1回～第30回]

※自治体名は開催当時





「棚田サミット」を 顧みる

早稲田大学名誉教授
NPO法人棚田ネットワーク名誉代表
棚田連絡協議会個人会員理事
棚田サミット開催地選定委員会委員長

中島峰広



棚田サミットは、司馬遼太郎に始まるといつてよい。司馬は、取材をかね同期兵との会合に出席するため高知を訪ねた折、宴席で梶原にある神在居の棚田について「中国の万里の長城」に比すべき遺産であると絶賛した。これを聞いた梶原町長の中越準一は棚田で町おこしができることを確信、1992年に神在居を舞台にして「棚田オーナー制」を立ち上げ、1995年には、基調講演・事例発表・パネルディスカッションを内容とする第1回「全国棚田サミット」を実現させたのである。

その後、サミットは「全国棚田連絡協議会」に所属する市町村に引き継がれることになり、第2回佐賀県有田町から第7回石川県輪島市までは木村尚三郎、今村奈良臣、富山和子などの高名な学者や浜美枝、岸ユキ、坂田明、柳生博、立松和平などのタレントによる特別・記念講演とパネルディスカッションが実施された。

画期的だったのが千葉県鴨川市で開かれた第8回サミットである。開催に当たり、NPO法人棚田ネットワークが企画段階から全面的に協力、これまでのような有名人を招く金のかかるサミットを排し、堂

本暁子千葉県知事の記念講演と、筆者をはじめとして東京農工大学教授千賀裕太郎、宇都宮大学教授水谷正一、信州大学教授木村和弘、農政ジャーナリストの会会長岸康彦、東京学芸大学教授小泉武栄、農と自然の研究所代表宇根豊など10人の第一線級の研究者をコーディネーターとする分科会を中心とするサミットが開かれた。

続く第9～11回までの岐阜県恵那市、佐賀県唐津市、愛知県新城市のサミットは、分科会の数が4～6に減ったものの内容は鴨川サミットを踏襲するものであり、大分県竹田市九重野地区担い手育成推進協議会会長後藤生也、佐賀県知事古川康、東大名誉教授木村尚三郎などを演者とする基調・特別講演が行われた。

第11回から第12回に至る頃は、サミットが存続の危機に直面した時期であった。第12回日南市のサミット自体は支出額1138万円の節約型で、鴨川市大山千枚田をはじめとする4か所の基調報告とパネルディスカッションを内容とするものであったが、より深刻な問題は平成の大合併を控え、次期開催地の市町村がないということであった。理事会では、終わ

りにするか存続するかの議論が行われ、存続が決まった。しかし具体的な方策はなく、誰かが各市町村を訪ね開催をお願いするしかないということになり、その役を個人会員の理事である私が担うことになり、今日に至っている。

第13回栃木県茂木町は、私が訪ねお願いした最初のサミットであったが、町長の独断専行により一旦決まった委員会の決定が覆され、県知事の基調講演と事例発表、県内市町村の宣伝紹介という内容だった。第14回サミットは長崎市と雲仙市の共同開催で基調講演と5つの分科会のほかあらたに首長会議が設けられ、これとほぼ同じ内容で第15回新潟県十日町市と第16回静岡県松崎町のサミットが開かれた。松崎町のサミットは、舞台となる石部の棚田が耕作放棄率の高さから百選に選ばれなかった因縁があり、集落の説明会に2度も出かけて行き説得、開催となったもの。川勝知事の基調講演と棚田学会設立時の仲間、篠原孝農林副大臣の出席が印象に残っている。

第17回徳島県上勝町サミットは人口わずか2300人の町で開かれたものであったが、第18回熊本県山都町サミット同様、県知事あるいは地元大学教授の基調講演と4～5分科会・首長会議を内容とし、他と比べても遜色ないものであった。第19回和歌山県有田町サミットは、町長自らが開催を申し出た唯一の事例であり、従来の内容に加え、この時から私が司会する棚田保存会意見交換会（棚田の

まもりびとミーティング）が始まった。第20回から23回の山形県上山市、佐賀県玄海町、新潟県佐渡市、長崎県波佐見町のサミットも従来通り基調講演・分科会・首長会議を内容とするものであったが、第14回から10年間続いた首長会議は出席者の減少により第23回で終了した。

第24回長野県小谷村のサミットは、基調講演に代わり事例ディスカッションが行われ、鴨川に次ぐ8つの分科会が設けられて賑やかなものであった。これに対し、第25回山口県長門市のサミットは基調講演と事例発表、ファッションショーなどもあったが、分科会は3つのみ、「まもりびとミーティング」は自主開催という不当な扱いを受けた。2020年山形県大蔵村の第26回開催予定のサミットはコロナ禍で翌年に延期されたが中止となり、紙上開催という気の毒な結果になった。私の立場を最も良く理解してくれた加藤村長さんだっただけに断腸の思いであった。コロナ後の第27回滋賀県高島市、第28回和歌山県那智勝浦町、第29回長野県上田市サミットは基調講演のほか3分科会と「まもりびとミーティング」が実施された

このように、30回のサミットの歴史を振り返ってみると、第8回鴨川サミットにおける一つの開催スタイルの提示、また継続においては開催地選定委員会の果たした役割が極めて大きかった、ということができる。



1：西山の棚田全景／2：「二八災害」で大きな被害を受けた棚田／3：棚田学校／4：棚田学校の稲刈り

西山地区は、三重県伊賀市の北西端、信楽山地の高旗山南面中腹の丘陵地に位置しています。集落に流れる西出川は一級河川で、木津川を経て大阪の淀川から大阪湾へと流れています。

歴史的な背景を述べると、昭和28年に発生した山津浪による被害と台風13号による二次被害を総称した「二八災害」（一般的には東近畿大水害と呼ばれています）では、棚田をほとんど喪失しました（約90％）。何より14名の人命が失われ、泥水や巨岩、流木に阻まれ、身動きが取れないという困難な状況を経験することになりました。その後、伊賀地域内外からのご支援を受けながら、牛や馬で土砂を運び、小中学生が集めたこぶし大の石を石工が積み上げるなど、先人たちが懸命に復興した結果、現在の西山の棚田が形成されました。他の地域の棚田と比較すると、比較的1筆ごとの面積が大きいのですが、これは復興の際に複数の田んぼを1筆にした名残です。

三重県伊賀市西山地区 棚田を活用した取り組み

西山地区では、令和5年に西山の棚田振興協議会を立ち上げ、伊賀地域の多様な組織との協働取組を実施しています。具体的には、春には地元企業の上野キヤノンメテリアルとの棚田展望公園・散策路の清掃活動、春と秋の伊賀市立上野北小学校との棚田学校、毎月開催するからさわ農園とのふれあい朝市などがあります。今年からは新たにJAいがふるさとの協働取組として、棚田米の作付け巡回診断なども行うようになりました。先人から引き継いだ美しい遺産「西山の棚田」を「未来：次世代」に伝えるために、今後多様な組織との連携を強化し、西山地区にとどまらない自然と融合した心豊かな伊賀地域の形成に努めていきたいと考えています。

棚田米のブランド化に向けて

一般の方でも想像できると思いますが、棚田を維持・管理するには非

常に多くの労力が必要です。平地の田に比べて小区画かつ不整形で、急な傾斜があるため、大変な手間がかかりますが、その労力に見合った収量が得られるわけはありません。このままでは担い手が減少し、これまでのような美しい棚田は消えてしまうことでしょう。

しかし、棚田は単にお米を作るだけではなく重要な地域資源としての価値を有しています。高低差があることで、美しい景色を一望でき、寒暖差が生まれて、おいしい棚田米を生産できます。さらに、山からの清らかな水や伊賀地域特有の重粘土質の土壌など、おいしいお米が育つ条件が整っています。また、棚田は豊かな多面的機能を持ち、都市部へ恵みをもたらしています。ですから、このおいしい棚田米を都市部の方々に味わっていただき、棚田米のブランド化を通じて宮農環境の改善を図ることで、担い手が安心して農業を営むことができるようにして、みんなの宝である棚田を何とか残していきたいと考えています。

移住者と女性による 新たな地域社会の形成

西山地区の人口は明治期以降、減少傾向にあり、高齢化が深刻な課題となっています。有難いことに、少しずつですが移住者も現れていますので、情報発信や移住者への支援を通じてさらなる移住者の誘致に取り組む予定です。また、近年では女性グループにより地場産こんにやく作りが行われ、共同農園で原料となる芋栽培も試行しているほか、からさわ農園の園主で、移住者でもある唐澤氏の地域に根づいた活躍など、女性陣による力強い地域活性化活動が行われています。移住者と女性によるさらなる活躍を実現するための支援・体制づくりを実施したいと思っています。

女性グループが作ったこんにやくは、毎月第3土曜日に開催している「ふれあい朝市」で販売（11月から5月までの期間限定）しています。ぜひ美しい自慢の棚田をご覧ください。ついでに、お立ち寄りいただければと思います。

（西山の棚田振興協議会 重倉純男）

棚田へのアクセス

【公共交通】 伊賀鉄道・上野市駅前から三重交通バス42番乗場より25分のバス停「西山」下車すぐ

【自動車】 名阪国道・上野ICより国道422号を北上し国道163号、県道138号経由で棚田に至る。ICから9km

お問い合わせ

伊賀市産業農林部農林振興課
Tel. 0595-22-9713



西山の棚田 冬



1：こんにやくづくり／2：ふれあい朝市／3：しめ縄づくり
4：西山神社のなすび祭り

棚田BAR ～棚田里山酒めぐり～

書き手：
大久保芳洋

棚田酒の25年

信州千曲・姨捨の棚田にちなみ、長野銘醸が「棚田」の商標を取得したのが25年前の2000年。近江高島では2002年から棚田産コシヒカリを醸した純米吟醸「里山」、奥出雲では2005年に「棚田五百万石」と、この頃は棚田保全を意識したお酒が多数生まれた時期だったようで、棚田サミットに準ずる棚田保全の歴史とも連動している。「醸造するすべての酒は地元の棚田産米である」という土佐・桂月などは、創業当時の明治10年から棚田酒を醸し続けている。

棚田酒は生まれては消えつつ、その銘柄数は増加傾向だ。この25年の中で洗練されたハイエンドなお酒としての棚田酒が続々生み出されている事は注目に値する。長岡の越銘醸では蔵人と酒販店が稲作を担う。令和の米騒動の最中、酒米の高騰を受けての醸造年度を迎えるが、自ら棚田での酒米の耕作に取り組むことで品質を高めてきたこうした酒蔵では影響も少なく、むしろブランド力を上げていく事だろう。一般参加者を酒米オーナーとしてオリジナル棚田酒を醸している地域も然り。

冒頭で紹介した千曲の元祖「棚田」酒。今は棚田の魅力を前面に出したラベルデザインにリニューアルし、季節限定酒を豊富に展開するプレミアム銘柄として人気を集めている。「飲みたいから棚田を守る」人が増えれば…令和の騒動も、人と棚田が近づききっかけになればと願う。



Tanada BAR



復活した田んぼで酒米の山田錦。手作りにこだわる昔懐かしい田んぼです

フォトエッセイ
よみがえる



写真・文
太田 左恵子

小さな棚田ゆえの大変さに、休耕田が増えた西谷棚田。私達がその復活に乗り出したのは、ほんの2年前のことでした。

手探りで始まった休耕田の復活に、仲間が増え、やがて西谷棚田軍団が結成され、小さくても耕作枚数は、3年前の倍以上に増えました。

西谷棚田軍団は、昨年から酒米作りにも挑戦。そして今年はなんと、30年間眠り続けた休耕田の復活も。

30年の壁は厚く、シヨベルカーは立ち往生、鍬を並べて人力で掘り返し。今、眠りから覚めた田んぼを眺めれば、胸が熱くなります。

さあ、いよいよ西谷棚田の酒米で造ったお酒が出来上がりました。よみがえる西谷棚田から生まれたお酒は、努力と希望の結晶。みんなの笑顔がいつばいです。

田んぼは道連れ、世は情け。皆さんも、西谷棚田のお酒はいかがですか？



太田左恵子 おおた さえこ

●略歴

1967年福島県の絹織物産地生まれ、桑畑と棚田に囲まれて育つ。実家は絹織物製造業。福島県二本松市の大七酒造に嫁ぎ、西谷棚田に出会う。「棚田再生仕掛け人」となり休耕田の復活にいましむ。現在、西谷棚田保全会会員、二本松市教育委員、二本松商工会議所女性会副会長、福島県森林の未来を考える懇談会委員

●著書

2023年：随筆『左恵子の随筆』福島県文学賞奨励賞を受賞
2025年：写真集『西谷棚田を守る人々～その出会いから、私は農業の偉大さを知りました～』（B5版変型160ページ）
発行所：大七酒造株式会社文化事業部
農業文化の伝承へのガイドブックであり必読の写真集



あの美しい景色をもう一度。休耕田と格闘する西谷棚田軍団

生きものの屋の 里山考

文・写真
(株)環境指標生物
町田 勇人

里山から世界に羽ばたく？

春になると本州から九州に飛来するサシバという猛禽類をご存じでしょうか？多くの地域では田んぼと雑木林が隣り合うような、いわゆる里山に飛来して子育てします。鳴き声がとても特徴的で「ピクイー」と響く声がかかるようになれば、姿が見えなくても声でその存在に気付くことができます。今回はそんな里山を象徴する鳥類のひとつ、サシバをご紹介します。



サシバはバツタなどの昆虫類だけでなく、カエルやトカゲなどの小動物を食べます。田んぼや草地、林など様々な環境を行き来しながら、巡る季節に応じて変化していく獲物やそれを捕まえる場所を変えます。こうして里山の環境を最大限に活かし、多様な生きものに支えられながら生きるサシバは、まさに生態系の頂点に位置する里山のシンボルと言えます。

子育てを終えた秋になると、冬越しのため南国に渡ります。遠くはフィリピンまで渡る個体も知られており、おおよその渡りのルートも解明されています。その壮大な渡りは国内各地で観察することができ、私も過去に、半日で四千羽ものサシバが他の猛禽類とともに次々に渡っていく光景を目の当たりにしたことがあり、その感激は今でも鮮烈に覚えています。

渡りの季節には、緑の多い公園や稀に都市部の上空など身近な場所でもサシバを観察することもあります。日に日に夏の暑さも和らぎ、外に出かける機会も多くなることがあります。その際は、ほんの少し空を見上げてみてください。きっとみなさんの近くでも、秋空のものと舞うサシバの姿に出会えるかもしれません。

里山の王者といわれるサシバ

棚田との出会いと学び

石川県金沢市
伊藤 若葉



私の棚田との出会いは、大学2年生のときに訪れた石川県輪島市の白米千枚田です。能登の里山里海を学ぶというプログラムの一環で現地を訪問し、耕作されている方からお話を聞かせていただきました。私は平野の広がる茨城県で生まれ育ち、棚田に馴染みがなかったため、小さな一枚一枚の田が幾重にも重なった棚田と海が調和する景色の美しさに心を奪われました。一方で、白米千枚田は観光やオーナー制度で広く知られているのにも関わらず、日常的に維持管理をする担い手の後継者が不足していることを知り、次世代に繋いでいくことの難しさを感じました。

さらに再度訪問しお話を伺う中で、棚田には非効率な側面もあるものの、その苦勞があるからこそ、自然の恵みや先人の努力に感謝しながら米作りが行われていることを知りまし

た。現代では苦勞を省いて効率化していくことを良しとする考えが多いなか、苦勞を肯定的に捉えている部分は、自分の価値観にはなく、深く感銘を受けました。その後、その価値観を深く知りたいと思い、棚田をはじめ、農業や里山にも関心を持ち、様々な活動に参加させていただきました。そのような経験を通して、改めて自然や人との繋がりの大切さを実感しました。

現在、大学4年生で、棚田の後継者不足問題をテーマに卒業研究に取り組んでいます。日常的に棚田の耕作管理を担う方々に焦点を当て、担い手となったきっかけや、継続的に関わり続けるために必要な環境について調査していきたいと考えております。調査のご協力を頂くかもしれませんが、その際はよろしく願いいたします。

読者のBest Shot!

池谷棚田
新潟県十日町市

特定非営利活動法人地域おこし 代表理事 多田 朋礼



例年行っている田植えイベントに今年は例年の倍にあたる約60名の方がいらっしゃいました。令和の米騒動の影響なのか、例年以上にお米に対する関心が高まっているように感じます。棚田を保全するためには、この令和の米騒動をチャンスと捉え、都会に住む人たちとより顔の見える関係を作っていく事が必要だと思います。「5kg4000円は高い」という消費者もいますが、棚田に足を運んで田植え体験などした人は皆さん「お米はこれまでが安すぎた」と言ってくれます。全国各地の棚田で後継者が増えるようなお米の流通体制を作りたいですね。

棚田環境大学2025レポート

明治大学法学部 棚田環境大学実行委員会代表 土屋 篤大

移り変わりの激しい昨今、今年も棚田環境大学の季節がきた。

私たちの生活は、無数の「環」によって成り立っている。自然環境、人間関係、地域社会、そして私たち自身の内なる世界。それぞれの「環」は互いに影響し合い、支え合い、循環して成り立っている。棚田環境大学は、そんな「環」を体現する。

自然の中で活動することで、自然と一つになり、その大切さを改めて感じることができる。また、仲間と一緒に泥だらけになりながら笑い合うことで、人と人との絆も強められる。我々一人一人が環境を大切にし、他者とのつながりを重んじ、自分自身とも向き合うこと。この3つの「環」を大切にし、発信することで、実際に参加していない遠くの人にも「環」を広げられる。

「環」のように端、つまり終わりのない営みを目指してこのテーマを設定した。

今年度の棚田環境大学は、約150人の関東の学生が大山千枚田に集い、実際に六種類ごとの農作業を体験し、一人一人が、農について正面から向き合った。映像や文章からだとは他人事しか感じられない農作業や、環境保全だが、実際に五感を通して、自分の体が、自然に触れることにより具体的な形で農経験を積むことができた。

また、2日目には前座に騎馬戦やリレーを添えて本企画の醍醐味である泥んこバレーボール大会を開催した。どの試合も熱狂し、互いに声援と泥をかけ合った。最下位決定戦では最下位を決めるのに相応しく、その様子はまさに「泥試合」であった。

今年度の泥んこバレーボール大会のトーナメントを制覇したのは、法政大学キャンパス・エコロジー・フォーラムのチームであった。

2日間で学生が本活動を通して広義の意味での自然を匂いや視覚的、もつとも肌で感じるにより農や里山の保全についての関心を少しでも抱くことができたと思います。身をもって得たそのきっかけを始点に次へと繋げ「環」のように終わりのない営みとしてまずは棚田環境学が大山千枚田のように今後も美しいものになることを望んでおります。



編集部イチオシ! BOOK & MOVIE



松戸の江戸時代を知る(5) 江戸時代の松戸河岸と鮮魚輸送



渡辺 尚志 著
発行人: 竹島いわお
1320円(税込)
たけしま出版
2025年4月

フルタイムワークをリタイアして、ウオーキングを趣味の一つにする私は町内会の敬老会のウォーキングクラブの副会長になってウォーカーにとっては魅力的な鮮魚街道(なま道)を歩いてみたいと思いついてみました。自衛隊の基地などが有りはつきりしない所があり延び延びになっていました。

さて、鮮魚街道ですが、これは銚子や鹿島灘で捕れた魚は船で利根川を遡って関根まで行き、そこで江戸川に入って日本橋で荷揚げするのが普通でした。これでは日数がかかり、又川の水量が減る夏季には大型の船が上流迄航行出来ないなどの問題がありました。そこで中流の布佐で荷物を馬に積み替えて陸路を通って松戸迄運んで又船に積み替えて日本橋に運ぶと云うショートカット輸送路が考えだされた訳です。

本書を読むと何処を通るかは布佐の荷宿(河岸問屋)五軒と松戸の河岸問屋八人との組み合わせにより色々なルートがあることが解りました。それに加えて新規参入者が新道を開発してくるので決まったルートを確定するのは難しいようです。と言う事で初期の目的は果たせませんでした。既得権者と新規参入者との役人を巻き込んだ利権争いが此の頃も有ったのだと言う事が解かり、大変面白く読むことが出来ました。

Project Report プロジェクトレポート

千葉県鴨川市 川代棚田でお米づくり

猛暑の中稲刈り体験イベント



今年は、連日35度を超える異常な猛暑が続き、夏休み最後の8月31日（日）も熱中症に気を付けながらの稲刈り体験となりました。ここ川代柿ノ木代棚田も、雨が少なく大変だったようですが、地元の方の努力により順調に生育し稲刈りを迎えました。ただ、イノシシに遊びまわられ、棚田ネットワークの田んぼも半分近くが被害にあいました。子供を含め20人以上の参加者による刈取り作業でしたが、倒れた稲を起こしながらで結構大変で、昼食後も作業が残りました。山裾の城西大学の田んぼは、ほぼ全滅で別の田んぼで稲刈り作業をしたそうです。これも異常気象の影響かも知れません。

ウクライナ戦争の影響による小麦の高騰は食料品の値上がりにとどまらず、お米不足にも影響し備蓄米の放出など異常な状況が続いています。棚田を含む農業の大切さを多くの方に再認識して頂くよう願わずにはいられません。猛暑の中の農作業体験で収穫した棚田米を食べて作業の苦労と棚田の魅力を感じて頂けると嬉しいです。（杉山行男）

岐阜県恵那市 棚田ビオトープ プロジェクト

棚田ビオトープの草取り



棚田ビオトープの草取りに行き、なごみの家で会った保存会の方から「あそこの稲は育っていない」との話を聞いた。私は「今からでも補植しようかな」と返答したところ、「昔から田植えは半夏生までと言われていた」（はんげしやうず）とのこと。草取りの日は7月5日。今年の半夏生は7月1日。七十二候の「半夏生（ハンゲ＝サトイモ科のカラスビシャクが生じる季節の意。ドクダミ科のハンゲショウではない）」は7月1日から6日まで。その期間には間に合っているけれど、心配になった。棚田オーナー制度の会員として草取りにいらっしゃった棚田ネットワーク代表の杉山さんに挨拶をし、急いで棚田ビオトープへ。雑草に隠れている小さな稲を見つけた。田植え長靴を忘れたので、裸足になって、草取りをする。ぬるつとした泥に五感が鍛えられる。いろいろあって異動となり、「近代的なオフィス」に勤める私にとってバランスを取る良い機会、などと思っていると、助っ人の杉山さんが登場。

その午後、娘の習い事である茶会に出席したら、ドクダミ科のハンゲショウが茶花として生けてあった。花のすぐ下の葉は、「半化粧」の名通り、京都の舞妓さんのように白光を放っていた。（相田明）

〔長野県大町市美麻の棚田から〕

美麻だより

長野県大町市 大門 正明

ほぼ1人で好きにやってる大町市美麻のボツンと一軒家の棚田の近況です。15年目の今年は25枚の細かい田んぼであきたこまち(箱苗7枚)、餅(2枚)、ササニシキ(3枚)、コシヒカリ(4枚)と4品種も作ってます。去年の米不足のとはばっちりササニシキの種籾が買えず、去年採れた籾を池田で育てた3枚以外は初めてのコシヒカリになった次第。

8月末現在、早かったあきたこまちより1ヶ月近く遅れてようやくコシヒカリの穂が熟し始めたところ。温暖化で山奥の気候も狂ってしまい、猛暑ときたま豪雨のひどい夏、人間界もプーチン、ネタニヤフ、トランプなど見たくもない顔が跋扈して末世とはこのことか!? という昨今、山奥の棚田の米が今年も無事収穫できそうなのが不思議なくらい。ただ、3人いる地主の1人に今年で田んぼやめてくれと言われていて、来年は真ん中の田んぼ3枚が作れなくなる。作業が減るのでガタ来てる体には楽になるが、景色が悪くなってしまうのが残念です。



第56回

棚田俳壇

令和7年

誌上添削

添削は今回おやすみです
【次回募集は11月末日】

行く夏をいまだ主役の備蓄米
稲刈りで玉の汗出る 猛暑かな
濁水を乗り越えみのる 稲穂かな
イノシシに蹴散らされたる 稲無残
取手市 杉山行男

花火咲く見上げて育つ 学校田
空梅雨で 山の田もまたヒビ割れて
恵み雨一息つきし 棚田かな
新潟市 田入絵人

風鈴蚊帳 火鉢など昭和も遠くなりけり
世の中は団扇も扇子も電動化
百足虫 蠅蚊 ゲジゲジ 知らぬ都会の子
蜻蛉 蝶々 蟬 燕も雀も 今やまれ
水なくてサイダー あけて 歯磨きす(山登り)
西瓜割り 皆んなで分けた 幸せよ
ガザの様 80年前のひもじさよ
地震津波 大雨山火事 120年 毒政 絶え間なく
調布市 高木宏明



写(アルプスの)裾に秋の芽 棚田かな
朝顔の命 寿ぐ 風の中
山ぶどう その時々 姿愛で
冴え渡る 誰に伝えむ 盆の月
比良山の 裾野広げる 稲の花
浜松市 一露



猛暑すぎ 揺れるすすきに 赤とんぼ
ひこばえの 実る 風情に いとおしく
今いづこ 秋刀魚の味も 疎くなり
頭垂れひと雨欲しいと 夏の稲
所沢市 上久保郁夫

新米でなくとも嬉しき 備蓄米
スズメシの 声聞こえるも 暑き夜
力込め 祈願する 昼 秋風鈴
夏休み 終わる 近きか 昼閑散
豊島区 小川順子



今回のつぶやき人

事務局

うっかりネジ

ここちよい場所

「ここちよい場所」。自分にとってそんな場所がいくつかある。
「棚田」はもちろんその筆頭に来るものですが、ここ十年来通っている三浦半島や図書館・美術館などもそう。少し疲れた時やもやもやしている時、そこにいると五感が覚醒して、自分のバランスを回復できるところ。そんな場所でしょうか？

最近、金沢に行く機会があり、美しい図書館として有名な「石川県立図書館」に行ってみた。

金沢駅から15分ほどバスに乗り場所にある、2022年にできたばかりの新しい図書館。外観は普通の四角い建物の建築なのですが、中に入ると突如現れる異空間。入り口から入った場所が図書館のちょうど中心部になっており、そこから360度円形に書棚が並び、球体の中に本が浮いているような不思議な感覚になる。ぐるりと散策するとたくさんの人たちが思い思いにゆったりと穏やかな時間を過ごしている。ここはみんなが穏やかな顔でいられる「ここちよい場所」なんだと感じた。そんな場所に巡り会えることがうれしい。



360度本に囲まれる空間。「里の恵み・文化の香り」コーナーには『全国棚田ガイド』を見つけた！



使いづらい、だけど美しい！ 始めてみよう『旧暦生活』

今年もできました！
ごよみ 棚田 旧暦
令和八年

月の満ち欠けでひと月を知り、太陽の動きで季節の移り変わりを感じていた「旧暦」での暮らし。
旧暦棚田ごよみは、四季折々の美しい棚田の風景とともに、暦で「季節感」を味わうことのできる旧暦カレンダーです。

壁掛けタイプ

A4(縦210×横297mm) ※開くとタテA3サイズ



旧暦がわかる
『ミニブック』
付いてます！



注文サイト
QRコード



四季折々の
棚田風景

二十四節気
七十二候
雑節を表示

新暦表示
もあり！

月の
満ち欠け
イラスト
入り！

5部セットがお得！
贈答用にどうぞ！

¥1,300(税込)

5部セット

¥6,000(税込)

※送料は別途かかります。

ご購入は

TEL. 03-5386-4001 もしくは棚田ネットワークHPから
●お電話受付時間 13:00 ~ 16:00 ※土日祝をのぞく

※このカレンダーは、旧暦の元日(令和8年2月17日)から始まります。
新暦表示は令和8年2月17日(火)から令和9年2月16日(月)までです。



わたしたちと『棚田の応援団』やりませんか！

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい！」という会員によって自主的に運営されているNPOです。
消えゆく美しい“棚田”をどのように保全していくことができるのでしょうか？一緒に考えませんか？ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう！

会員に
なろう！

年会費

私たちは、会報誌「棚田に吹く風(年4回)」やホームページで豊富な棚田情報を発信しています。会員になりこれらの活動に参加してみませんか？

○個人会員

維持会員	1口1万円(1口以上)
一般会員	4,000円
応援会員	3,000円
学生会員	2,000円

法人会員を募集しています！

私たちは、棚田を守るため、農山村の人々と都市住民双方の協力のもとに様々なプログラムを企画・運営しています。これらの社会貢献活動に賛同し、ご支援いただける企業・団体・事業主様を募集しています。詳細はお問い合わせ下さい。

年会費

○法人会員(賛助会員)
1口3万円(1口以上)

「旧暦棚田ごよみ」の制作の季節がやってきた。制作の最大の楽しみは写真選びの会議だ。メンバーが集まり、青柳健二さんの撮りおろし、または撮りためた写真から、その年の旧暦の季節に合わせ選んで行く。難しいのは、旧暦は同じ睦月(二月)でも、その年によって季節がかなり違うこと。つまり新暦の1月中旬から2月の中旬くらいまでのふり幅があったりする。また、地域的な偏り、無名が有名か、寄りか引きか、土坡が石積みか、過去の使用頻度など、さまざまなバランスを考慮しなくてはならない。必然的に、毎年候補にあがりながら選ばれない写真もあり、会議でしか会えない愛すべきキャラとなっている。

編集部から

ホームページのぞきを見て

棚田NAVI
354地域掲載中！



<https://tanada-navi.com/>

棚田に吹く風

2025年 秋号 Vol.137

発行



認定NPO法人

棚田ネットワーク

〒160-0023

東京都新宿区西新宿7-18-16トーションハイム新宿704号

Tel / Fax 03-5386-4001

e-mail: info@tanada.or.jp URL: www.tanada.or.jp

郵便振替口座: 00100-7-151565